

Saptapadārthi の和訳解説 (1)

菱 田 邦 男

はしがき

Saptapadārthi は『七句義論』、『七原理篇』などと和訳されることがある。七句義とは、dravya (漢：実＝実体)・guṇa (漢：徳＝性質)・karman (漢：業＝運動)・sāmānya (漢：同＝普遍)・viśeṣa (漢：異＝特殊)・samavāya (漢：和合＝不可分関係)・abhāva (漢：無＝非存在)を指しており、これら七つの (sapta) 句義を根本要素として宇宙の一切は構成されている、とこの書では説く。句義 (padārtha) とは「言葉 (pada) の対象 (artha)」という意味である。この書の立場では、あらゆる実在は言葉によって表わされるから、宇宙の一切を構成する要素たる、dravya・guṇa・karman 等も「言葉の対象」即ち「句義」と称せられるのである。

世界を諸要素に分析し、それら諸要素から宇宙は成り立つとする見解は勝論学派 (Vaiśeṣika) の立場であるが、この書は「正理勝論 (Nyāya-Vaiśeṣika) 学派」と言われる統合学派 (syncretist school) の最初期の作品に属するとされる (D. Gurumurti, Introduction, p. xxx)。Saptapadārthi では、句義論の中に論理学も含めて説かれているが、勝論学派の説と正理学派の説のうち、いずれの学説がより濃く顕われているかといえば、勝論説である。例えば、正理学派では聖言量 (śabda) は独立の量 (pramāṇa) とされるが、Saptapadārthi では聖言量は比量 (anumāna) の中に含まれている。つまり、この書が、勝論学派の代表的書物である Prasastapādabhāṣya と同様に、二量 (現量・比量) 説を守っている点は、この書の勝論的特徴を示すものである。

Saptapadārthi は、Udayana の Lakṣaṇāvalī, Annambhatta の Tarkasaṃgraha, Keśavamīśra の Tarkabhāṣa 等と同様に、一種の綱要書であり、正理勝論学派の根本思想を学習するには、最も適切なマニュアルの一つである。Saptapadārthi の著者である Śivāditya の年代ははっきりしていないが、Udayana とほぼ同時代の10世紀後半とする説が有力のようである。V.S. Ghate によれば、Śivāditya は Prasastapādabhāṣya の注釈書 Vyomatī の著者 Vyomaśiva と同一人物らしいという (Ghate 版 SP, Introduction, p. ix)。しかしながら、J.S. Jetly は、両者は別人である、と主張する。その理由は、Śivāditya が聖言量を比量の中に含めているのに対して、Vyomaśiva は聖言量を独立の量とみなして、三種の量 (pramāṇa) を挙げているからである (Jetly 版 SP, Introduction, p. 12)。

さて、和訳を試みるに際しては、

- (1) The Saptapadārthī of Śivāditya together with its Commentary, the Mitabhāṣinī of Mādhava Sarasvatī. Edited by N.C. Bhattacharya and A.M. Bhattacharya. Calcutta Sanskrit Series No. 8, 1934. (SP と略称)

を底本として用い、

- (2) The Saptapadārthī of Śivāditya together with its Commentary, the Mitabhāṣinī of Mādhava Sarasvatī. Edited by Rāma Śāstrī Tailanga. Vizianagram Sanskrit Series vol. 6, 1893. (Rāma 版 SP と略称)
- (3) Saptapadārthī by Śivāditya with the Commentary, Padārthachandrikā by Śeshānanta. Edited by V.S. Ghate. Bombay, Second Edition, 1919. (Ghate 版 SP と略称)
- (4) Śivāditya's Saptapadārthī with a Commentary (Jinavardhanī) by Jinavardhana Sūri. Edited by J. S. Jetly. Ahmedabad, 1963. (Jetly 版 SP と略称)
- (5) Saptapadārthī of Śivāditya. Edited with Introduction, Translation, and Notes by D. Gurumurti. Madras, 1932. (Gurumurti 版 SP と略称)

を参照した。なお、参照した Saptapadārthī の注釈 (Commentary) に関しては、

Mita. —Mitabhāṣinī by Mādhava Sarasvatī

Pad. —Padārthachandrikā by Śeshānanta

Jin. —Jinavardhanī by Jinavardhana Sūri

と略称する。このほか、

- (6) Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda. Gaekwad's Oriental Series No. 136, Baroda, 1961. (VS, C 本と略称)
- (7) Vaiśeṣikasūtra with the Commentary, Upaskāra of Śāṅkara Miśra. Kashi Sanskrit Series No. 3, Benares, 1923. (VS, U 本と略称)
- (8) Praśastapādabhāṣya=Padārthadharmasamgraha, Vizianagram Sanskrit Series vol. 4, Benares, 1895. (PBh と略称)

等も参照した。

本稿では論旨を明確に表現するために、必要に応じて、訳文中に [] を用いて言葉を補足し、又、訳文の間に解説を挿むなどした。更に、SP 本文の和訳文には梵文を対照させた。

帰敬偈

Saptapadārthī の著者 Śivāditya は彼の句義論に入るに先だって、Śiva 神に対して帰敬偈を捧げる。この著作が途中で挫折することなく、無事滞りなく完了することを神に祈願するためである。

| 全世界の原因 (hetu) であり、輪廻の海 (arṇava) に架かる橋 (setu) であり、あらゆる学

問 (vidyā) の師 (guru) である主宰神 Śambhu に帰命する。

hetave jagatām eva saṃsārārṇava-setave |

prabhava sarva-vidyānām śambhave gurave namaḥ ||

Śambhu は、「慈悲深い」という意味の形容詞でもあるが、ここでは Śiva 神の別名である⁽¹⁾。Śambhu は全世界の原因 (hetu) であるとされているが、この場合の原因は動力因 (nimitta-kāraṇa) を意味し、和合因 (samavāyi-kāraṇa) や不和合因 (asamavāyi-kāraṇa) を意味するのではない。「輪廻の海に架かる橋」とは、輪廻転生に苦しむ者達の救済者を意味する。著者が、ここで Śiva 神の属性として最も強調したいのは、Śiva 神があらゆる学問の師であるという点であろう。学問の書である Saptapadārthi の成就を著者は願うからである。

第 I 章 句義の列挙

この章においては、Śivāditya は七句義を列挙し、更に各句義を細別して列挙する。まず、句義自体が挙げられ、その本性が示される。

句義は正知 (pramiti) の対象 (viṣaya) である (1)。

pramiti-viṣayāḥ padārthāḥ ||1||

Śivāditya によれば、宇宙の構成要素たる句義は正しい認識の対象である。Mita. によれば、正知 (pramiti) とは、如実なる知 (yathārtha-jñāna) である。つまり、対象をありのままに正しく把握している認識である。そして、その対象 (viṣaya) とは、所量 (prameya) である。つまり、正しい認識によって把握され得るものが如実知の対象である⁽²⁾。

Jin. によれば、ここでの「句義 (padārtha)」とは、定義されるべきもの (lakṣya) を指しており、「正知の対象 (pramiti-viṣaya)」とは、定義 (lakṣaṇa) を指している。したがって、この箇所は「句義」自体の定義が説かれている、と解することができる。Jin. は更に、「正知 (pramiti) とは、正しい観念 (pramā) である。それ (正知) の対象 (viṣaya) とは、〔正知によって〕把握されるもの (grāhya)、即ち把握が可能なるもの (grahya-yogyā) であり、それらが句義である」と注釈している⁽³⁾。

そして、それら (句義) は実体 (dravya) ・性質 ((guṇa) ・運動 (karman) ・普遍 (sāmānya) ・特殊 (viśeṣa) ・和合 (samavāya) ・無 (abhāva) という 7 種に限られる (2)。

te ca dravya-guṇa-karma-sāmānya-viśeṣa-samavāyābhāvākhyaḥ saptāiṣa ||2||

「それら (句義) は…… 7 種に限られる (saptāiṣa)」という表現は書名 Saptapadārthi (七句義論) の根拠を示している。Jin. によれば、「7 種に限られる」とは、8 種 (aṣṭa) でもなければ、6 種 (ṣaṭ) でもない、という意味である⁽⁴⁾。

Mita. は七句義の順序理由を次のように説明する。実体 (dravya) は他のあらゆる句義の基体 (ādhāra) であり、和合因であり、そして句義の中で最も重要なもの (pradhāna) であるから、最初に挙げられる。性質 (guṇa) はあらゆる実体に依存し、実体生起の一刹那後 (uttara-kṣaṇa)

に生じ、実体に密接しているから、実体の直後に挙げられる。運動 (karman) は性質と異な⁷って、常時実体に依存するわけではないが、普遍の基体であるから、性質の直後に挙げられる。普遍 (sāmānya) は遍在性 (anuvṛttitva) を有し、三句義に依存するから、運動の直後に挙げられる。特殊 (viśeṣa) は普遍を対立者 (pratiyogin) としているから、普遍の直後に置かれる。和合 (samavāya) はこれら五句義の結合関係 (sambandha) であるから、第6番目に置かれる。無 (abhāva) は六句義の否定 (niṣedha) を本性とするから、最後に挙げられる⁽⁵⁾。

そのうち、実体は地 (pṛthivī) ・ 水 (ap) ・ 火 (tejas) ・ 風 (vāyu) ・ 虚空 (ākāśa) ・ 時間 (kāla) ・ 方角 (diś) ・ アートマン (ātman) ・ マナス (manas) の9種に限られる(3)。

tatra dravyāṇi pṛthivy-ap-tejo-vāyv-ākāśa-kāla-dig-ātma-manāṃsi navāiva ||3||

「そのうち (tatra) とは、「七句義の中で (saptasu madhye)」(Mita.) という意味である。Jin. によれば、地・水・火の三つは最高の量 (pramāṇa) である現量 (pratyakṣa) によって把捉され得るので、最初に記される。そのうち、地・水に具わる性質 (guṇa) が14種であるのに対し、火のそれは11種であるから、地・水が最初に置かれ、地は一切の基体であるから、一番最初に置かれる。風は外官 (皮膚) によって把捉される性質 (触) の基体であるから、3実体の次に置かれる。地・水・火・風は虚空を場として集合するから、虚空はこれら4実体の次に置かれる。時間と方角は形体を有するものにのみ存する遠在性・近在性 (paratvāparatva) を生ぜしめるから、或は、多種の有形体物の原因であるから、虚空の次に置かれる。アートマンは遍在するこれら (虚空・時間・方角) を統一するために、これらの次に挙げられる⁽⁶⁾。

一方、性質 (guṇa) は色 (rūpa) ・ 味 (rasa) ・ 香 (gandha) ・ 触 (sparśa) ・ 数 (saṃkhyā) ・ 量 (parimāṇa) ・ 個性 (pṛthaktva) ・ 合 (saṃyoga) ・ 離 (vibhāga) ・ 遠在性 (paratva) ・ 近在性 (aparatva) ・ 覚 (buddhi) ・ 楽 (sukha) ・ 苦 (duḥkha) ・ 欲 (icchā) ・ 嫌悪 (dveṣa) ・ 努力 (prayatna) ・ 重さ (gurutva) ・ 流動性 (dravatva) ・ 粘着性 (sneha) ・ 慣性 (saṃskāra) ・ 法 (dharma) ・ 非法 (adharma) ・ 声 (śabda) の24種に限られる(4)。

guṇās tu rūpa-rasa-gandha-sparśa-saṃkhyā-parimāṇa-pṛthaktva-saṃyoga-vibhāga-paratvāparatva-buddhi-sukha-duḥkhēcchā-dveṣa-prayatna-gurutva-dravatva-sneha-saṃskāra-dharmādharmāśabdāś catur-viṃśatir eva ||4||

VS においては、色 (rūpa) から努力 (prayatna) までの17種が guṇa として挙げられているが (VS, C 本 I-i-5; U 本 I-i-6), PBh になると、更に重さ (gurutva) から声 (śabda) までの7種が加えられて24種となっている (PBh p.11)。SP における guṇa の数及び配列順序は PBh のそれと同じである。Tarkasaṃgraha においては、guṇa の数は同じであるが、順序に変更があり、アートマンの固有の性質である覚 (buddhi) ・ 楽 (sukha) ・ 苦 (duḥkha) ・ 欲 (icchā) ・ 嫌悪 (dveṣa) ・ 努力 (prayatna) ・ 法 (dharma) ・ 非法 (adharma) ・ 慣性 (saṃskāra) が最後に配列されている⁽⁷⁾。この順序の方がより整備されている。

運動 (karman) は上昇 (utkṣepaṇa) ・ 下降 (apakṣepaṇa) ・ 屈折 (ākuñcana) ・ 伸長 (prasāraṇa) ・ 進行 (gamana) の5種に限られる(5)。

： karmāṇi utkṣepaṇāpakṣepaṇākuñcana-prasāraṇa-gamanāni pañcāiva ||5||

上昇 (utkṣepaṇa) は、物体 (dravya) を虚空の下方部分から分離させ、上方部分と結合させる原因となる運動、つまり上昇運動を指す。下降 (apakṣepaṇa) は、上昇とは正反対方向の結合・分離の原因となる運動、つまり下降運動を指す。屈折 (ākuñcana) は、真っ直な物体の一方の端が他方の端に接近して、全体が屈折する運動を指す。伸長 (prasāraṇa) は、屈折していた物体が真っ直に伸びる運動を指す。進行 (gamaṇa) は、上昇等 4 種の運動が一定方向の運動であるのに対して、不定方向の運動を指し、回転 (bhrama)・放物 (recana)・流動 (syandana)・迂回 (namana) 等の運動を含んでいる。

普遍 (sāmānya) には、上位のもの (para) 下位のもの (apara)・上下位のもの (parāpara) という 3 種がある (6)。

sāmānyam param aparam parāparam cēti trividham ||6||

PBh では、普遍 (sāmānya) は上位のもの (para) と下位のもの (apara) という 2 種に分けられており、この分け方は Tarkasaṃgraha においても同様である⁽⁸⁾。Śivāditya は、これら 2 種に、更に上下位のもの (parāpara) を加えて普遍を 3 種に分類する。これは恐らく SP 独自の分類であろう。

Jin. は「それぞれ個々別々なものに関して、包括の観念 (anuvṛtti-pratyaya) が生ずる場合、普遍 (sāmānya) がそれ (包括観念) の原因である。それ (普遍) には 3 種ある。包括のみの原因 (kevalānuvṛtti-hetu) となるのが上位のもの (para) であり、上位のものに比して遙かに小さく包括する (atyaḥ-ṛtti) のが下位のもの (apara) であり、それら両者の本性 (tad-ubhaya-svabhāva) を具えるのが上下位のもの (parāpara) である」⁽⁹⁾と説明する。ある事物の有する本性と同じ本性が他の多くの事物にも存する場合、その本性を包括したものが普遍である。例えば、個々別々の牛 (go) が「牛」と一般に称せられるのは、それぞれの牛には牛性 (gotva) という普遍が和合しているからである。

Ghate によれば、上位のものは存在性 (sattā) を指し、下位のものは瓶性 (ghaṭatva) 等を指し、上下位のもの、句義 (padārtha) に対しては下位にありながら、地 (pṛthivī) 等に対しては上位にある実体性 (dravyatva) 等を指す⁽¹⁰⁾。したがって、牛性 (gotva) は下位の普遍に属する。Gurumurti は、SP による普遍の分類 (3 種) は 2 種に分ける説よりも論理的に優れている、と評価する⁽¹¹⁾。

一方、特殊 (viśeṣa) は存在する数だけの常住なる実体に依存するから、無数である (7)。

viśeṣās tu yāvan-nitya-dravya-vṛttitvād anantā eva ||7||

常住なる実体 (nitya-dravya) とは、虚空 (ākāśa)・時間 (kāla)・方角 (dīś)・マナス (manas)・アトマン (ātman) という 5 種の実体と地・水・火・風の原子 (paramāṇu: 極微) を指す。これらには共通の本性は存在しないから、普遍 (sāmānya) は存在せず、特殊 (viśeṣa) のみが存在する。特殊は常住なる実体の各々について区別の観念を生ぜしめる原因である。常住なる実体 (原子) は無数に存在するから、それらに依存する特殊も無数に存在する。

これに対して、和合 (samavāya) は唯一である (8)。

samavāyas tv eka eva || 8 ||

和合 (samavāya) は全体 (avayavin) と部分 (avayava) の関係 (例えば布と糸)、実体と属性の関係 (例えば瓶とその色)、個物と普遍の関係 (例えば牛と牛性) などのような、離れては成立しないもの (ayuta-siddha) の関係、即ち分離不可能なるものの結合関係を指し、唯一である。では、何故唯一であるのか。「糸に布あり」・「布に色あり」等の観念における「ここに (iha) あり」という観念は和合を原因として生ずる。そしてこの観念はあらゆる場合に同一形相を有するから、その観念の原因たる和合も唯一とされるのである。PBh (p.328) によれば、和合は量 (pramāṇa: 認識手段) によってその原因が捉えられないから、存在性 (bhāva=sattā) と同様、常住 (nitya) である。

一方、無 (abhāva) には未生無 (prāg-abhāva) ・已滅無 (pradhvaṃsābhāva) ・交互無 (anyonyābhāva) ・畢竟無 (atyantābhāva) としての特相を有する 4 種がある (9)。

abhāvas tu prāg-abhāva-pradhvaṃsābhāva-anyonyābhāvātyantābhāva⁽¹²⁾-lakṣaṇaś catur-vidhaḥ || 9 ||

未生無 (prāg-abhāva) は結果が未だ生じていない時点の無 (非存在) を指す。例えば「ここに布が生ずるであろう (iha paṭo bhaviṣyati)」(Mita.) という場合には、ここに布の未生無があることを意味する。已滅無 (pradhvaṃsābhāva) は果が滅した後の無を指す。例えば「棍棒等による打撃が起こると、瓶等の破壊がある (lakuṭādy-abhighāte jāte ghaṭādi-vināśaḥ)」(Jin.) という場合、瓶の已滅無がある。交互無 (anyonyābhāva) は相互に同一性が認められない場合の無を指す。例えば「瓶は布にあらず。布は瓶にあらず (ghataḥ paṭo na bhavati, paṭo ghaṭo na bhavati)」(Jin.) という場合、瓶には布の交互無があり、布には瓶の交互無がある。本性上の区別 (svarūpa-bheda) によってのみ、相互の区別がある場合に、交互無は起こり得る。畢竟無 (atyantābhāva) は時間的に限定されない無、事物の存在しない所には何処にでもある無、そして、無始無終なる (anādy-ananta) 無を指す。したがって、「ここに瓶がない」という一般的な無とか、「アートマンには色の無があり、瓶等には知の無がある (ātmani rūpasya, ghaṭādiṣu jñāna-syābhāvaḥ)」(Jin.) という場合の無は畢竟無である。

地 (prthivī) には常住なるものと無常なるものがある。常住なるものは極微 (paramāṇu) としての特相を有し、無常なるものは果 (kārya) としての特相を有する。それ (無常なるもの) は更に身体 (śarīra) ・感官 (indriya) ・対象 (viśaya) という特相を有する。身体はわれわれ (asmad) 等に存するものであり、現量 (pratyakṣa) によって確立される。感官は香 (gandha) を顕示する鼻 (ghrāṇa) である。対象は瓶 (ghaṭa) 等である (10)。

prthivī nityā anityā ca | paramāṇu-lakṣaṇā nityā, kārya-lakṣaṇā tv anityā | sâpi śarīrēndriya-viśaya-rūpā | śarīram asmad-ādinām pratyakṣa-siddham, indriyaṃ gandha-vyañjakam ghrāṇam; viśayo ghaṭādiḥ ||10||

勝論学派によれば、地・水・火・風の 4 種の実体は極微 (paramāṇu)、即ち原子から成ってい

る。原子は常住であるから、これら地・水・火・風は単独原子のままの状態では常住である。しかし、複数の原子が結びついて複合体（果）になったものは無常である。何故なら、複合体としての地・水・火・風は再び分離されて原子に還元され得るからである。この意味で地・水・火・風の実体には常住なるものと無常なるものとの2種類があると説かれているのである。

無常なる地、即ち果としての地は更に身体（śarīra）・感官（indriya）・対象（viṣaya）に分類され、現量によってその存在が確立される。「身体はわれわれ等に存するもの（asmad-ādinām）」とは、われわれ等の身体が地のみを成分としていることを意味する。「われわれ等」に関しては、Jin. (p. 13) によれば、「われわれ（asmad）」は人間（mānuṣa）を指し、「等（ādi）」は神（deva）・詩仙（rṣi）・蟻（pipilikā）・蛇（sarpa）等を指すようである。

果としての地等を3種に分類する考えは、すでに VS に現われており、「そこで更に、果としての実体である地等は、身体・感官・対象という3種〔に分類される〕⁽¹³⁾」と説かれている。

水（ap）にも2種ある。常住なるものと無常なるものとである。常住なるものは極微としての特相を有し、無常なるものは果としての特相を有する。それ（無常なるもの）は更に身体・感官・対象という特相を有する。身体はヴァルナ（Varuṇa）神の世界に存する。感官は味（rasa）を顕示する舌（rasana）である。対象は川・大洋（sarit-samudra）等である (11)。
āpo 'pi dvividhāḥ, nityā anityāś ca | paramāṇu-lakṣaṇā nityāḥ | kārya-lakṣaṇās tv anityāḥ |
tā api śarīrēndriya-viṣaya-rūpāḥ | śarīraṃ varuṇa-loke | indriyaṃ rasa-vyañjakam rasanam |
viṣayaḥ sarit-samudrādīḥ ||11||

「身体はヴァルナ神の世界に存する」ということが何を意味しているかは明瞭ではない。Mita. は「聖教によって確立されている（āgama-siddha）」と補足するに過ぎない。Tarkasaṃgraha にも、これと同じ表現があり、Athalye は Notes の中で、「水の身体はヴァルナ神の世界にいる生きもの達によって所有される」と説明している。しかし、彼は、この表現は地に関する表現との釣合（symmetry）を狙って挿入されたものらしい、と述べ、更に、このような表現は、あらゆるものに類似（analogies）・釣合を求めようとする熱心さが、往々にして、是認し難い（unwarranted）不条理な（absurd）結論をもたらすことになる好例である、と皮肉っている⁽¹⁴⁾。

Jin. は「水は常に流動するから、水から成る身体には享受（upabhoga）等の能力はなかろう」という反論を予想して、次のように説く。水の部分（原子）から成る身体は、地の部分の支持を受けて、地の部分と結びつく。この結合によって、水の流動性は阻止され、水の部分から成る身体も特定の享受能力を具える⁽¹⁵⁾。

無常なる水の感官は舌（rasana）であるということは、舌の先端にある味覚器官の主要成分が水であることを意味する。

火（tejas）にも常住なるものと無常なるものがある。常住なるものは極微としての特相を有し、無常なるものは果としての特相を有する。それ（無常なるもの）は更に身体・感官・対象という特相を有する。身体はアーディトヤ（Āditya）神の世界に存する。感官は色（rūpa）を顕示するもの（眼）である。対象は地的なもの（bhauma）・天的なもの（divya）・

腹中のもの (audarya)・鉱物性のもの (ākaraja) としての特相を有する (12)。

tejo 'pi nityam anityam ca | paramāṇu-lakṣaṇam nityam, kārya-lakṣaṇam anityam | tad api
śarīrēndriya-viṣaya-rūpam | śarīram āditya-loke | indriyaṁ rūpa-vyañjakam | viṣayo bhauma-
divyāudaryākaraja-rūpaḥ ||12||

Mita. によれば、無常にして果である火の身体がアーディトヤ神の世界に存することは、プラーナ (purāṇa) 文献等においてよく知られているという。

果たる火の対象の4種について、Jin. にしたがって説明しよう。地的なもの (bhauma) とは、薪等を燃料とする地上の火を指す。天的なもの (divya) とは、天空 (gagana) に存する火であり、太陽 (sūra)・稲妻 (vidyut) 等を指す。腹中にあるもの (audarya) とは、腹 (udara, jaṭhara) の中であって、食された食物を排泄物・汁・要素の状態 (mala-rasa-dhātu-bhāva) に変化させる消化熱を指す。鉱物性のもの (ākaraja) とは、文字通りに解すると、「鉱山 (ākara) より生じたもの (jāta)」という意味であるが、光沢を具える金 (svarṇa)・銀 (rūpya) 等を指す⁽¹⁶⁾。

ところで、金・銀が火に属するとは奇異な感じを受けるが、これは次のような理由に基づく。先ず金・銀は地より成るもの (pārthiva) ではないか、という疑義が起るが、これに対する答えはこうである。金・銀は極度に熱せられても、その流動性 (dravatva) を失わないが、地より成るバター (ghṛta) は極度に熱せられると焦げ付いて流動性を失う。この場合のバターが流動性を保つには水 (jala) という阻止物 (pratibandhaka) が必要である。しかし、金・銀はそれを必要としない。金・銀及び地は依因的 (naimittika) 流動性を有するという点では共通するが、火との合によって、地 (バター) が究極には燃焼するのに対して、金・銀は決して燃焼しない。故に、金・銀は地より成るものではない。次に、金・銀の流動性が依因的なものであるのに対して、水の流動性は本来的なもの (sāmsiddhika) であるから、金・銀は水に属さない。更に、金・銀は色を有するから、風及び時間等に属さない⁽¹⁷⁾。

風 (vāyu) にも常住なるものと無常なるものがある。常住なるものは極微としての特相を有し、無常なるものは果としての特相を有する。果を特相とするものは身体・感官・対象・氣息 (prāṇa) としての特相を有する。身体はヴァーユ (Vāyu) 神の世界に存する。感官は触 (sparśa) を顕示する〔皮膚 (tvac)〕である。対象は木等の震動 (vṛkṣādi-kampa) を引き起すものである。一方、氣息は身体内部で活動する (śarīrābhyantara-cārin) 風である。それ (氣息) が作用の相違 (kriyā-bheda) によって「アパーナ (apāna)」等の名称を得る。しかし、静かな (stimita) 風は極微の集合 (samūha) に過ぎず、〔果として〕構成された実体ではない (13)。

vāyur api nityo 'nityaś ca | paramāṇu-lakṣaṇo nityaḥ | kārya-lakṣaṇo 'nityaḥ | kārya-rūpaḥ
śarīrēndriya-viṣaya-prāṇa-lakṣaṇaḥ | śarīram vāyu-loke | indriyaṁ sparśa-vyañjakam | viṣayo
vṛkṣādi-kampa-janakaḥ | prāṇas tu śarīrābhyantara-cārī vāyuḥ, sa eva kriyā-bhedād apānādi-
samjñāṁ labhate | stimita-vāyus tu paramāṇu-samūha evānārabdha-dravyaḥ ||13||

果である風は、身体・感官・対象の他に氣息が加えられて4種である。身体内で動く風とされ

る氣息 (prāṇa) は作用や場所の別によって、プラーナ・アパーナ (apāna)・サマーナ (samāna)・ウダーナ (udāna)・ヴィヤーナ (vyāna) の5種に分けられる。

身体内を動く風を代表するプラーナは胸部にあって、口と鼻から出入りし、呼吸・嚥下の働きをする。アパーナは直腸・肛門等にあって、排泄物等を下方に押し進める。サマーナはへそ辺りにあって、食物の消化熱を混ぜ合わせる。ウダーナは喉にあって、上方に昇り、音声を作り出す。ヴィヤーナは全身を循環し、血行促進等の働きをする⁽¹⁸⁾。

閉めきった全く風の入らない部屋の中でも、扇子を動かせば、風の実在は感じられる。この風は外部から入ってきたものではなくて、最初から部屋の中に静止状態で存在していたものが扇子の作用によって感じられるようになったのである。室内のこの静止風は全く別な種類の風として分類されなければならない。静止風は常住にして超感覚的な、極微 (原子) としての風には含まれない。扇子の補助を得てその触が捉えられるからである。又、静止風は無常なる、果としての風でもない。扇子の使用前にはその触は知覚されないからである。この疑義に対するテキストの答弁は次のような意味である。静止風は極微の集まりに過ぎないのであって、果として構成された実体ではない (anārabdha-dravya)。扇子の作用によってはじめてそれらの極微が結合して果となり、触を通してその果の存在が感知される。したがって、静止風 (stimita-vāyu) は常住なる風に含まれる⁽¹⁹⁾。

一方、虚空 (ākāśa) は瓶の虚空等の種類に分けられ、実に無数 (ananta) である (14)。

ākāśas tu ghaṭākāśādi-bheda-bhinno 'nanta eva ||14||

虚空はあらゆるものに存在と運動の場所を与える無形質なる空間である。虚空は本来唯一であり⁽²⁰⁾、常住であり、遍在するものであるが、例えば瓶に囲われた空間のように、種々様々な条件 (upādhi) によって分割されているから、外見上は無数である。

一方、時間 (kāla) には発生 (utpatti)・持続 (sthiti)・消滅 (vināśa) としての特相を有する3種がある (15)。

kālas tu utpatti-sthiti-vināśa-lakṣaṇas trividhaḥ ||15||

虚空と同様に時間 (kāla) も本来唯一常住遍在であるが、条件的 (aupādhika) 区別として発生・持続・消滅を有する。Mita. (p. 12) は「発生によって未来 (bhaviṣyat) が、持続によって現在 (vartamāna) が、消滅によって過去 (bhūta-kāla) が理解される」と注釈している。Jin. によれば、時間に存する条件 (upādhi) とは、事物 (padārtha) に対する時間の原因性 (nimittatva) である。つまり、時間はあらゆる事物 (結果) の発生・存続・消滅の動力因 (nimitta-kāraṇa) である。本来唯一であるはずの時間が発生等に分類されるのは、一人の人間が舞踊活動をする事によって「踊り子 (nāṭaki)」とされたり、料理活動をする事によって「料理人 (pācaka)」とされるのと同様であるという⁽²¹⁾。

方角 (diś) には東 (āindri)・東南 (āgneyi)・南 (yāmyā)・南西 (nairṛti)・西 (vāruṇi)・西北 (vāyavi)・北 (kauberi)・北東 (aiśāni)・下方 (nāgi)・上方 (brāhmī)・中央 (raudri) という11種がある (16)。

dig aindri āgneyī yāmyā nairṛti vāruṇī vāyavī kauverī aiśānī nāgi brāhmī raudrī cēty ekādaśa-
vidhā ||16||

ここに列挙されている方位名の原語はすべて神々の名前に由来している。各方角にはそれぞれ特定の神が守護者として住するとされているからである。aindri (東) は Indra 神が住する方角 (diś), āgneyī (東南) は Agni 神, yāmyā (南) は Yama 神, nairṛti (南西) は Nairṛta 神, vāruṇī (西) は Varuṇa 神, vāyavī (西北) は Vāyu 神, kauverī (北) は Kubera 神, aiśānī (北東) は Īśāna 神 (=Śiva 神), nāgi (下方) は Nāga 神, brāhmī (上方) は Brahmā 神, raudrī (中央) は Rudra 神が住む方角である⁽²²⁾。方角も本来唯一常住遍在である。

虚空 (ākāśa) を始めとする三つ〔の実体〕は本性上は唯一である。条件 (upādhi) の区別から異なったものとなる (17)。

ākāśādi-trayaṃ tu vastuta ekam eva upādhi-bhedān nānā-bhūtam ||17||

「虚空を始めとする三つの実体」とは虚空・時間・方角を指す。これら3実体は本来唯一常住遍在であることから、これら三つの間には本質的には相違はない。3実体は本性上は唯一 (同一) であるが、それぞれの条件を具有することによって、虚空・時間・方角という別々の実体になる。したがって、3実体から各条件が離脱した場合には、3実体には区別がなくなり、それらは全く同一となる。

Gurumurti は、この3実体同一説を、「Śivāditya の最も意味深長なる見解の一つであり、……現代の形而上学的、物理学的、数学的理論の中で最も論議されている問題の一つである」⁽²³⁾と評価する。

一方、アートマン (ātman) には最高我 (paramātman) と知田者 (kṣetra-jñā) という2種がある。最高我は自在神 (Īśvara) であり、唯一である。知田者はわれわれ等であり、無数である (18)。

ātmā tu paramātmā kṣetra-jñāś cēti dvividhaḥ | paramātmā īśvara eka eva | kṣetra-jñā
asmad-ādayo 'nantā eva ||18||

Jin. によれば、最高我 (paramātman) とは、最高の (parama), 卓越せる (utkrṣṭa), 一切を知る (sarva-jñā), あらゆる能力を具えた (sarva-sāmarthya-vat), 一切苦を離脱せる (sarva-duḥkha-rahita) アートマンである。そして、最高我は最高神たる自在神 (Īśvara) であり、大地・山等の創造者であることから、唯一者とされる。

一方の知田者 (kṣetra-jñā) は身体を有するアートマンを指すと考えられる。身体は無数に存在するので、知田者も無数に存在することになる。kṣetra とは、直接的には「田畑」「耕地」を意味する。田畑において植物の種子が育ち、実るように、身体においても行為の影響 (adrṣṭa) が育ち、実るので、kṣetra は「肉体」「身体」の意味にも用いられる。ここでの kṣetra は「田畑」よりも「身体」の意味に解すべきである⁽²⁴⁾。kṣetra-jñā は「田 (身体) を知るもの (jñā)」という意味であり、ここでは「知田者」という一般に用いられる訳語を記したが、「知身者」と訳す方が真の意味に近いといえる。「身体を知るもの」とは、「身体を統括者として知るもの」という

意味であろう。この意味から、知田者は、個々の生体に内在して統括するアートマン、即ち個我 (jivātman) を指すことになる。

マナス (manas) は各アートマンに依存しているから、無数である (19)。

manas tu pratyātma-niṣṭhatvād anantam ||19||

マナスは、各身体に内在する知田者 (kṣetra-jñā) たるアートマンに依存する。知田者は無数であるから、各知田者に一つずつ依存するマナスも無数である。

勝論学派や正理学派では、二つ以上の知覚が同時に生起することを認めない。例えば鳥を見ながら鳴声を聞くという場合、鳥の知覚と声の知覚は同時に生ずるのではなく、順次に生ずるとされる。2 覚以上の同時生起は不可能であるから、マナスは各身体内に 1 個のみ存在すると推理される。多なる知覚が順次に生起するためには、マナスは迅速に移動できなければならないので、マナスは原子の大きさであり、常住である。マナスがアートマンと感官の両方に結びつくことによってはじめて知覚は成立するので、マナスは注意力を実体視したものと考えられる⁽²⁵⁾。

虚空 (ākāśa) を始めとする五つ〔の実体〕はすべて常住のみである。他〔の四つの実体〕は常住でもあり、無常でもある (20)。

ākāśādi-pañcakam nityam eva | aparam nityānityam ca ||20||

虚空を始めとする五つの実体とは、虚空・時間・方角・アートマン・マナスを指す。これら 5 実体はすべて常住のみであって、決して滅することはない (avināśin)。Jin. (p. 25) は「部分たる実体 (avayava-dravya) を有しないから。極微 (paramāṇu) の如し」と理由説明をする。他の四つの実体とは、地・水・火・風を指す。これら 4 実体は、極微のままでは、常住であるが、結果、即ち 2 微果 (dvi-aṇuka = 2 原子体) 等になると、無常である。

注

- (1) 底本では、書名の直ぐ上に、「唵、シヴァ神に帰命する (om namaḥ śivāya)」と記されている。
- (2) SP, p.13, l.15.
- (3) Jetly 版 SP, p.4, ll.19-20.
- (4) Ibid., p.5, l.11.
- (5) SP, p.14, l.17-p.15, l.8.
- (6) Jetly 版 SP, p.7, ll.1-6.
- (7) Tarkasaṃgraha of Annambhaṭṭa, ed. by Y.V. Athalye, Bombay, 1963, p.5. なお、一番最後の慣性 (saṃskāra) は、厳密に言えば、勢用 (vega)・印象 (bhāvanā)・弾性 (sthitisthāpaka) の 3 種に分けられ、その中の印象がアートマン固有の属性である。
- (8) PBh (p.311) には sāmānyam dvidvidham param aparam ca とあり、Tarkasaṃgraha (p.5) には param aparam cēti dvidvidham sāmānyam とある。
- (9) Jetly 版 SP, p.8, ll.10-11.
- (10) Ghate 版 SP, Notes, p.5.
- (11) Gurumurti 版 SP, p.8.
- (12) Ghate 版 SP (p.5) 及び Jetly 版 SP (p.10) では atyantābhāvānyonyābhāva (畢竟無・交互無)

- の順になっており、Tarkasaṃgraha (p.6) もこれと同じ順序である。
- (13) VS, U 本 IV-ii-1 (C 本は欠く): tat punaḥ pṛthivy-ādi kārya-dravyaṃ trividhaṃ śarirēndriya-
viśaya-saṃjñakam.
- (14) Tarkasaṃgraha p.8, p.110.
- (15) Jetly 版 SP, p.14, ll.22-24.
- (16) Ibid., p.18, ll.13-16.
- (17) Ibid., p.18, l.25-p.19, l.2. Tarkasaṃgraha (Dīpikā) p.8, ll.15-22, Notes pp.112-113.
- (18) Ghate 版 SP, Notes pp.9-10. Tarkasaṃgraha, Notes p.115. なお、底本 (p.20) の脚注には、
Sadānanda による Vedāntasāra のプラーナ説が引用されている。それによると、プラーナは前方に
進む風であり、鼻の先端 (nāsāgra) に存在する。アパーナは下方に進む風であり、肛門 (pāyu) 等に
存在する。ヴィヤーナはあらゆる方向に進む風であり、全身に存在する。ウダーナは喉 (kaṇṭha) に
存在し、上方に進み、臨終に抜け出る風である。サマーナは身体の中央 (śarīra-madhyā) に存在し、
飲食された食物を消化する働きを有する。
- (19) SP (Mita.) p.21, ll.9-15. Jetly 版 SP (Jin.), p.21, ll.2-4. Ghate 版 SP, Notes pp.10-11.
- (20) 虚空が存在性 (bhāva=sattā) と同様に唯一であることは、VS (C 本 II-i-28; U 本 II-i-29) にお
いて説かれている。
- (21) Jetly 版 SP, p.21, ll.13-17. なお、PBh (p.63) において、時間はあらゆる結果 (sarva-kārya) の
発生・存続・消滅の原因であることが説かれている。
- (22) 方角と守護神との関係は PBh (pp.66-67) において説かれている。PBh では、方角は東から上方ま
での10種であるが、SP では、更に10方の中央地点を方位に加えて11種としている。Jin. p.22, l.11:
'raudri' daśānām api diśāṃ madhyama-bhāga iti.
- (23) Gurumurti 版 SP, pp.19-20.
- (24) Gurumurti (Ibid., p.21) が述べるように、Bhagavadgītā の第13章には知田 (kṣetra-jña) に関する
説明があり、第1偈に、「この身体 (śarīra) は、クンティー姫の子よ、『田 (kṣetra)』と称せられる」
とある。
- (25) Nyāyasūtra (I-i-16) では、「同時に知覚の生起しないことがマナス〔存在〕の証相である」と、
VS (III-ii-1) では、「アートマンと感官と対象が接触している場合でも、知覚が生じたり生じなかつ
たりすることがマナス〔存在〕の証相である」とマナスの定義が説かれている。